

研究ノート

鍾理和の満洲経験と満洲叙述

伊 蒙 楽

はじめに

第1節 満洲経験について

第2節 満洲叙述における文学的空間

おわりに

(要約)

1938年、鍾理和は客家人の「同姓不婚」の風習により結婚を反対されたことをはじめとした複数の要因が重なり、満洲国に渡った。その後、1946年に台湾に帰るまでの約8年間中国に滞在していた。その間、鍾理和は文学に注力し、数多くの作品を創作するが、それらは奉天を背景にした書いた作品が少なくない。本論は自伝的色彩の濃い鍾理和の満洲叙述を分析する前段階として、これまで究明されてこなかった、鍾理和が通学・通勤していた満洲自動車学校や奉天交通株式会社について考察を行い、鍾理和の満洲経験を明らかにする。また、鍾理和の「都市的黄昏」（「柳陰」）、「泰東旅館」、「地球之徴」、「門」の5篇の作品に描かれた文学的空間を切り口にし、文学的空間がしだいに縮小していくことから、鍾理和の満洲認識の変化を窺う。

はじめに

「満洲事変」勃発した後、満洲は帝国日本の「生命線」として、植民地台湾の各新聞で満洲に関する記事が一気に増え、「満洲ブーム」が起きた¹。『台湾日日新報』²のなかで、満洲を含む記事は3000点以上あった。地理的にかなり離れているにも関わらず、満洲は徐々に台湾人の生活のなかに溶け込み、彼らの日常の一部となった。

そうした背景の下、台湾文学のなかでも満洲がしだいに登場しはじめた。満洲に渡ったことのない台湾人作家たちは、当時の新聞記事を通して植付けられたイメージによって、機会と危険が併存する場所として満洲を描いた³。ただし、台湾人作家のなかでも、満洲での実体験を持ち、さらに小説のなかに反映した者もいた。鍾理和はその一人である。

鍾理和は台湾郷土文学の先駆者、台湾文学史上重要な作家として、広く注目を浴びている。鍾理和は1938年6月に満洲に渡り、1946年3月まで8年間中国で暮らした。渡航はおもに個人的な理由、つまり客家人の「同姓不婚」という風習によって、鍾台妹との婚姻が許されなかったからである。そのほかの理由としては、友人廖清秀へ送った手紙のなかで「少しばかり民族意識が作用していたようである」⁴とも述べている。

鍾理和の創作への試みは1930年の早い段階にすでに始まっていた⁵。満洲を背景にした作品は1938年から1945年の間につくられた5つの作品があり、そのなかでも、「友情」、「泰東旅館」、「地球之徴」の3作は未完稿である。創作の早期であったためか未熟かつ未完成のものが多。満洲経験を背景に創作した小説は鍾理和作品のなかでも十分に議論されてきたとは言えない。

鍾理和の満洲叙述⁶と彼の個人経験を重ねると興味深い点に気がつく。作品の執筆順から検討すると、満洲叙述における主人公は、鍾理和の満洲での足どりと一致していることがわかる⁷。言い換えれば、鍾理和は自身の各時期の満洲経験にしたがって、物語を構想した可能性があるのだ。この点を踏まえて鍾理和の満洲経験を明らかにした上で、満洲叙述を一貫して再考察すれば、複数の作品における満洲描写の変化を明確にできるだけでなく、鍾理和の満洲認識の全体像を窺うことも可能だろう。

しかし、満洲を叙述した鍾理和の各作品は、題材はもちろんのこと、主人公の視点や叙事方法もそれぞれ異なる。そのため、登場人物、プロット、物語の展開などを中心とする従来の分析方法では、彼の満洲叙述の全体像を把握しがたい。こうした問題を解明するために、筆者は文学作品における「空間」に着目する。鍾理和は友人との手紙のなかで、作品における時間と空間について次のように触れている。

小説と「物語を語る」こととの違いは、文体上の差異にある。前者の手法は描写的であり、後者の手法は記述的である。(中略) 記述体の作品は、まるで白髪の宮女が昔のことを嘆きながら語るようなものであり、聞き心地はよいものの、そこには出来事だけで、経過が欠落している。ただ時間の緯度があり、縦の叙述があるだけで、背景もなく、場所もなく、空間の経度も、横の描写も欠如している。⁸

以上から窺えるように、鍾理和は小説において「時間の緯度と縦の叙述」だけでなく、「空間の経度と横の描写」も不可欠であると考えている。彼は小説の創作に関して、作品における「空間」の重要性を意識していたと考えられる。

1980年代末の「空間論的転回」⁹を契機として、文学研究における空間理論も注目されるようになった。イギリスの文化地理学者マイク・クラングは『Cultural Geography』で、文学における空間を検討するために一章を費やしている¹⁰。たとえば、クラングはエミール・ゾラの『ボヌール・デ・ダム百貨店』¹¹を例として、この小説は19世紀後期の百貨店に焦点を当て、完全に真実でも虚構でもない女性に属する斬新な都市空間を構築していると述べている。百貨店という空間を描くことで、理性的認識とコントロール、男性権力、経済の繁栄と苦境および性別化された欲望を描き出したと指摘している¹²。そのほか、ホメロスの『オデュッセイア』、ヴィクトル・ユゴーの『レ・ミゼラブル』なども例として、文学における空間について論じた。

文学的空間と現実の関係について、クラングは以下のように述べている。

テキストは単に外部の世界を反映しているわけではない。どこまで世界を正しく描写しているかのみを重要視することは間違いである。(中略) 文学地理学は文学と地理学の結合としてとらえられるべきである。文学を外部の世界を屈折させ、または反映するレンズや鏡として扱うべきではない。同様に、文学は単なる客観的地理知識を感情的に描写するのみならず、文学は世界を認識するための方法も提供し、情趣、経験と知識といった多様な地理景観

を幅広く示している。¹³

クラングの空間理論に基づき、中国人研究者の王欽欽は文学的空間を以下のようにまとめている。

文学的空間とは、作家が文字記号を道具とし、現実世界を手本として構築する一つの空間形式である。文学的空間は、現実的空間の模倣と再現であり、現実的空間のなんらかの特徴を有する一方で、現実的空間と同じではない。それは作者によって虚構された芸術的な空間であり、暗喩性、象徴性、段階性、倫理性、審美性などの特徴を備えている。¹⁴

そうしたクラングの空間理論を基に鍾理和の満洲叙述をみると、物語の背景は同じ満洲であるものの、焦点を当てて描写・構築した文学的空間は、作品ごとに異なっていることがわかる。一方で、クラングは次のようにも述べている。

文学作品は、世界を反映する鏡ではなく、複雑な意味のネットワークの一部である。独立しているあらゆる作品は必ずほかの作品と関連している。（中略）複数の作品における異なる観点は、ある相互に関連しているネットワークを構成し、そのネットワークを通じて世界を理解する方法が示される。¹⁵

クラングが言うように、鍾理和の満洲叙述を文学的空間に着目しつつ扱うことによって、鍾理和の満洲に対する描写、さらに彼の満洲認識をある流動的なものとしてとらえ、その変化の過程を把握することが可能となるだろう。

先行研究

以上のような本論の関心に従い、鍾理和の満洲経験と満洲叙述の両面から先行研究を整理する。

まず、鍾理和の北平経験については多くの先行研究¹⁶で言及されるが、満洲経験について詳細に考察したのは今泉秀人の論文のみである。今泉は、奉天交通株式会社、および鍾理和の仕事内容などを含めた満洲経験について考察している。また、鍾理和が通った「満洲自動車学校」などの経験については、まだ調べがつかない箇所もあるという¹⁷。

一方、鍾理和の満洲を背景に創作した小説に関する先行研究は多い。紙幅は限られているため、以下の2篇を紹介する。

董慧は、鍾理和の「泰東旅館」、「門」、「夾竹桃」に描かれた空間は、流動的でありながら、閉塞的なものでもあると述べている。また、このような空間描写は鍾理和の心理状態と関わっているという。原郷に戻ったものの、帰属感を得られなかった鍾理和は、つねに不安定な漂泊感を感じていた。そしてその不安定感と共存しているのが、作者の自己閉鎖的な意識であると指摘して

いる¹⁸。

王璇は、鍾理和が北平と奉天での下層社会の生活経験を基にして、ネガティブな中国空間を構築していると述べている。そのネガティブな描写がなされたのは、戦時中の中国の都市における思想の遅れと物質的貧困を目撃したことによって、都市空間に幻滅したからだという。また、その批判対象である作中の都市空間からは、近代化と思想の啓蒙が遅れていた中国の現状および啓蒙運動の不徹底さにも彼の批判が向けられていたことがわかると指摘している¹⁹。

鍾理和の満洲経験や満洲叙述に関する研究を概観すると、鍾理和の満洲経験にはまだ明らかにされていない部分があると言える。また、「柳陰」と「門」のような完成稿についての分析は多いものの、未完稿の「泰東旅館」と「地球之黴」に対する研究は比較的少ないと言えるだろう。

以上の認識をもとに、本稿では二つの部分に分けて考察を進める。まず、鍾理和の満洲体験において、明らかにされていない部分を考察する。そのうえで、創作の時間軸にしたがって鍾理和の満洲叙述における文学的空間を分析し、それぞれの作品における文学的空間の関連性に着目する。それにより、満洲叙述の全体像を明らかにし、鍾理和の満洲認識へのアプローチを試みる。

第1節 満洲経験について

台湾の中央研究院が作成したデータベース「台湾総督府旅券系統」によれば、1938年4月から6月の間に、鍾理和は従兄の邱連奇とともに「呉服産業状況視察」という理由で満洲国奉天と新京への旅券を取ったという²⁰。同年6月、鍾理和と邱連奇は満洲奉天に向かい。邱連奇の兄で鍾理和の従兄弟の邱連球も、煉瓦工場を起こすために満洲に渡った。その後、鍾理和と邱連球は資金を集めるために台湾に戻る。しかし、鍾理和は父の鍾鎮榮から煉瓦工場への出資を断られた。鍾理和は満洲に戻って邱連奇と一緒に「満洲自動車学校」に入学した。1940年秋に運転手免許を取得し、邱連奇とともに奉天交通株式会社のバス運転手になった。生計を立てた後、1940年7月に台湾に戻り、8月3日に密かに鍾台妹を連れて奉天に出奔した。1941年、鍾理和は雪道で事故を起こしたため運転手免許が取り消され、会社からも解雇されてしまった²¹。その後、1941年7月に家族で北平に移住した。鍾理和の満洲滞在期間は、1938年6月から1941年7月までの約3年間である。

1. 満洲自動車学校

「地球之黴」に、運転手として働く主人公が、「私はさ、来た時、ちょうど自動車ブームの最中に間に合った。それでうやむやでこの服を着てしまった」²²という話がある。そこからは、鍾理和が自動車業界に携わった時代背景が窺える。

1920年代から、日本は国産軍事車両を確保し、1933年に内務省の自動車取締令、すなわち免許法が全面改正された。その一方で、軍を中心に自動車の運転手が不足しており、民間の自動車教習所がこれ以降次々と作られていったという²³。日本の自動車産業の急成長にともない、植民地に相当する満洲でも、自動車運転技能をもつ人材のニーズがしだいに増えていた。『盛京時

報』²⁴を調べると、1936年からしばしば運転手を募集する広告が見られるが²⁵、自動車学校からの学生募集の広告が頻繁に見られるのは1938年1月からである²⁶。そこには東亜自動車学校、新京自動車学校、同和自動車工業株式会社附属自動車運転手養成所など、複数の学校が挙げられる。「現在運転手の人材はきわめて少ない。今後の運転手に対する需求はさらに拡大する。実は就職する絶好のチャンスである。意欲があれば速やかに入学すべし」²⁷と各自動車学校がこぞって用いた広告の文言からは、満洲での自動車産業の成長と運転手の人手不足という現状が窺える。

さらに、鍾理和の作品「都市的黄昏」では、朝鮮人同級生の金君が満洲自動車学校への入学理由について以下のように述べている。

私はよく満洲がどんなにすばらしく、どんなに素敵な新天地かをよく聞かされた。学生時代の同級生だけでも、土地を離れた人は少なくないが、その大部分が満洲に来て自動車業界に入った。（中略）ちょうど新報でこの学校の新入生募集の広告を目にしたので、私も来る決意をしたのだ。²⁸

このように鍾理和は、多くの朝鮮人が運転手として求職するために満洲に渡ったシーンを描いている。自動車の運転技能を持っている人材に対するニーズが、満洲での自動車学校の成立を促した一方で、朝鮮や台湾にも影響を及ぼし、自動車業界に入るために植民地から満洲へ移動したケースは珍しくなかったと考えられる。鍾台妹と結婚するために、満洲に渡って「経済自立」に向けて焦った鍾理和が、就職しやすい自動車業界を目指したことも理解しやすい。

さらに、この引用文からわかるように、金君が入学したきっかけは「新報」²⁹で学生応募の広告を目にしたからである。目下、鍾理和が通った満洲自動車学校に関する資料はきわめて少ないが、当時の奉天の主要紙であった『盛京時報』の広告頁から、満洲自動車学校が一体どのようなものであったのか、その一端を垣間みることができるだろう。

新入生の募集

八月一日より新学期が始まり 本校を卒業した後に免許に合格した人数は最も多い 現在在学学生百十人余り 校内の施設が十分完備されており、東洋一番と言える

- 一、新式の練習用車が十輛余り、そのほかにトラックもある
- 二、練習場が広い
- 三、映画で授業する
- 四、各種の実物標本が数千件に達する
- 五、教室、寮の施設が完備
- 六、修理工場、実習工場の施設も完備

ほかに無料の職業紹介部がある 各科目の学员を募集する

本科 三ヶ月卒業 五十名

受験科 一ヶ月卒業 十名

速成科 二ヶ月卒業 五十名
株式会社奉タク附属 満洲自動車学校
奉天商埠地十一緯路五五 電話 (一一) 一九四四³⁰

さらに、1940 年 7 月 4 日の広告から、満洲自動車学校は後に「満洲自動車専門学校」と改名していたことがわかる。学生数も 1938 年の 110 人余りから 1940 年の 300 人余りに増えている³¹。調べたところ、1930 年代の奉天で比較的大規模な自動車学校は、上述の学校のほかに、東亜自動車学校と同和自動車工業株式会社附属自動車運転手養成所しか見られない。同和は大手自動車製造会社の運転手養成所であり、入所試験を必要とし、入学難易度も高かったと思われる³²。満洲自動車学校と同じく私営であった東亜自動車学校と比べると、学校の施設と学生数はそこまで差がないものの、東亜自動車学校が満洲人向けであったのとは異なり、満洲国自動車学校は日本語で授業を行っていた³³。それも鍾理和が満洲自動車学校に入学した要因の一つと推測できる。

そして住所からみると、商埠地とは、19 世紀末に清朝政府自ら外国人のための居留地や商業地区を設置した地域であった。1918 年、商埠地では奉天省長の王永江によって北市場と南市場が開設され、劇場、商店、ホテルなどが林立し、奉天の繁華街として発展していった³⁴。さらに、商埠地十一緯路については、目貫通りとして記載されていることから、満洲自動車学校は当時の繁華街にあったことがわかる³⁵。

2. 奉天交通株式会社

鍾理和が運転免許取得後に就職した奉天交通株式会社とは、一体どのような会社であったのだろうか。『満洲交通史稿』によると以下のことがわかっている。奉天交通株式会社は満洲国における交通国策遂行の第一段階として、満洲国交通部の指示で大連都市交通株式会社、奉天市公署、奉天電車株式会社、満洲自動車運輸株式会社の各自が国策順応の立場で協力することに合意したことで始まった³⁶。

1940 年、鍾理和はそこでバス運転手として働いた。1939 年 6 月 30 日の奉天交通株式会社の「営業路線」によれば、奉天市のバス路線は郊外線 5 本、市内線 21 本、そのほか奉天遊覧線という「特殊線」があった。1930 年代、満洲における交通や観光事業が大きく成長した結果、奉天遊覧バスは満洲全域に先がけて運行を始め、満洲自動車運輸株式会社は 1934 年 5 月 1 日から営業を開始した。1937 年 2 月、奉天交通株式会社は満洲を代表する規模の観光バス会社となった³⁷。奉天交通株式会社の遊覧線は 2 本あり、奉天駅から出発し、国立博物館、北大營、青葉小街などの 10 駅を経て奉天駅着の一周で 50km の長コース、そして同じ奉天駅から出発し、6 駅を経て奉天駅着の一周で 33km の短コースがあった³⁸。しかし、残念ながら、鍾理和が担当していたバス路線を確認することは難しい。

そのほかに、『盛京時報』に掲載された求人広告には以下のことが書かれている。

汽車運転手応募

応募人員：満洲国人若干名

資格：普通免許証および就業免許証を持っている者

年齢：満二十歳以上

試験期日：一月二十六日午前九時

試験場所：小西邊門外交通会社乗務員教習所

右の応募を希望する方は、試験期日まで履歴書および最近の写真を持って教習所まで問い合わせてください。あるいは履歴書を送ってくるか、いずれでも構いません。

康德五年一月十八日

奉天交通株式會社³⁹

以上の試験会場は、昔の電車廠事務所である。奉天交通株式会社が成立した後、その事務所は奉天駅前に移転している⁴⁰。鍾理和はこの会社での実体験から「地球之徴」を創作しており、小説における配車室と運転手控え室は上記の「小西邊門外交通会社乗務員教習所」だと思われる。

以上本節では、『盛京時報』、『満洲交通史稿』などの資料を用いて、鍾理和が通学・通勤した満洲自動車学校と奉天交通株式会社について考察し、鍾理和の満洲経験をさらに明らかにした。鍾理和の満洲叙述のなかで、「柳陰」⁴¹とその初稿である「都市的黄昏」は満洲自動車学校での学生生活を背景にした小説であり、「地球之徴」は奉天交通株式会社での就労経験に基づいて創作されたものである。こうした鍾理和の満洲経験に関する考察は、彼の満洲叙述を論述する際に、作品を理解するための背景知識となる。

第2節 満洲叙述における文学的空間

本節では、鍾理和の満洲を背景にした作品に描かれ、構築された空間を分析した上で、各作品における文学的空間の関連性を探究し、それがどのような意義を有しているのかを分析する。

まず、満洲を背景にした鍾理和の作品の創作時間や創作地などの情報を、以下の表1にまとめた。また、「友情」の原稿は2頁しかなく、あらすじとしても成立していないため、検討の対象としない。

表1⁴²

作品名	完稿時間	創作地	状態
「友情」	1938 年	奉天	未完成
「都市的黄昏」	1939 年 1 月 14 日	奉天	光復後「柳陰」に改稿、未発表
「泰東旅館」	1941 年	北平	未完成
「地球之徴」	1944 年	北平	未完成
「門」	1945 年 10 月 5 日	北平	原題「絶望」、未発表
「柳陰」	1954 年 8 月 21 日	高雄	1959 年『聯合報』復刊で発表

1. 「都市的黄昏」(「柳陰」)

まず「都市的黄昏」と「柳陰」の作品内容をそれぞれ簡単に紹介する。

「都市的黄昏」の語り手である「私」は、従兄弟の君飛と自動車学校に通っている。第二実習場で運転練習をした際に、「私」は朝鮮人の金泰基と仲良くなる。金泰基は15歳のときに、親が決めた相手と結婚しており、現在22歳の彼にはすでに5歳の娘がいる。自分の婚姻について、「幸福の桎梏、生命の枷」⁴³と述べている⁴⁴。

家庭を養うために、「金君」は満洲国に渡って自動車学校に入学したが、経済的な理由から学校をやめ、アイスクャンディーを売って家計を支えるようになった。卒業後に「金君」は運転免許の試験を受けるため、金を借りて来たこともあったが、「私」はちょうど留守だった。小説の最後、街で偶然アイスクャンディーを売っている「金君」と会い、彼が運転免許の試験を諦めたことを知る。冬になると、「私」はかつて「金君」が借りていた寮に引っ越した。そして大家のお婆さんから彼らの話を聞く。彼は貧しさから、家賃が払えなくなり、一家でこの寮から出て、行方がわからなくなったという。

「柳陰」は、「私」が運転練習をする際、朝鮮人同級生の朴信駿と金泰祺と知り合いとなることから始まる。「朴君」は幼い頃から許嫁がいたものの、ある女性と恋に落ちた。その恋愛が双方の親から反対されたことから、「朴君」は満洲に逃げ、女性は妓女となった。金泰祺は若い頃に親が決めた女と結婚して、娘もいる。ある日、「金君」が「私」に会いにきて、朴信駿からの手紙を渡した。朴信駿はその女性のために張家口に行った。その後、「私」は奉天交通株式会社で働き、かつて金が借りていた寮に引っ越したものの、大家のお婆さんから、金は家賃が払えなくなり、おそらく一家で朝鮮に戻ったのではないかと聞く。小説の最後、主人公は朴の「女のために、不合理な婚姻のために、私たちはこんなにたくさんの苦難を受けなければならない!」⁴⁵という言葉思い出す。このセリフは小説の趣旨を鮮明に伝えている。

また、「都市的黄昏」では、金泰基は早婚と「包辦婚姻」⁴⁶によって不幸になった人物として描かれている。「私」はその不幸の傍観者として、以下のような感想を発する。

この話を聞いて、思わず優越感をおぼえた。彼——金君——という自分と違う存在を目にした時、不満足で不幸のなかにあっても、少なくない慰め、得意、自負を感じた。しかし、この慰め、得意、自負の裏で、一抹の恐ろしくてうら寂しい秋風が私の心をかすめ、私を震わせ、私は冷たい気を吐いた。また、遠く離れていない前方には、見渡す限り白くてぼんやりした海が広がっていることを気づかせる。⁴⁷

親の意志にしたがって結婚した「金」は「私」と異なる存在であり、彼の不幸を目にした「私」は、自分が「包辦婚姻」に反抗する勇気を持っていたことを得意に感じている。しかし、彼の不幸から気づかされることもある。「私」も遠くない未来に——恋人の鍾台妹を連れて満洲へ出奔することを考えると、やはり未知の困難が待っていることを予期せざるをえない。

「都市的黄昏」と比べると、「柳陰」は朴信駿というキャラクターが加わり、朴の言葉を借りて

「金君」の人生が語られるよう変更されている。そのためストーリーはより簡素になっている。「朴君」は「私」と同じように「包辦婚姻」を避けるために満洲に渡ったが、恋愛のために反抗できず、恋人は妓女になってしまった。「金君」は相変わらず不幸者で、「早婚と包辦婚姻の犠牲者」⁴⁸である。

「都市的黄昏」で婚姻制度に服従した「金君」と反抗した「私」は、明らかに対照的に描かれている。しかし、包辦婚姻によって若くして家庭の重荷を背負わなければならず、妻と娘を養うために満洲に渡ってきた「金君」、そして「同姓不婚」という風習から逃げるために、故郷から遠く離れた満洲に渡ってきた「私」は、二人とも婚姻制度によって不幸な運命となる。そして「柳陰」ではもう一人の対照的な人物が加わる。不合理な婚姻制度から逃げたにもかかわらず、自由恋愛を遂げていない朴信駿、婚姻制度に服従した「金君」、婚姻制度に反抗して自由恋愛を遂げた「私」が、奉天に集まっている。

「都市的黄昏」でも「柳陰」でも、ストーリーは主人公の奉天での移動にともない展開する。しかし、鍾理和が焦点を当てて描写している奉天は、チャンスに満ちた新興都市ではなく、不合理な婚姻制度による不幸者が集まった空間である。言い換えれば、この2作は婚姻制度による不幸者たちの避難所として、「奉天」という空間を構築しているのである。

2. 「泰東旅館」

「泰東旅館」は鍾理和の最初の長編小説で、未完成ではあるものの、物語としての骨組みはほぼ完成に近いと考えられる。

「泰東旅館」の内容は以下の通りである。泰東旅館は三合院で、十数部屋を有する奉天の下層旅館である。泰東旅館に住んでいる宿泊客は日本語学院の5人の学生（阿片を吸う佟文振と楊光祖、一緒に1号室に住んでいる李護、呉容、王建東）、さらに鼓書を唱える韓小姐と父の2人、馬警察官などである。「私」は妻と友人の沈若彰の3人で5号室に住んでいる。

皆はいつも夕方になると、1号室に集まって、韓小姐の鼓書を聞く。ある日、「私」は、呉容のために王建東が韓小姐に皮肉を言っている場面を目撃した。そのことをきっかけに呉容が韓小姐に惚れていて、彼女に大金をかけたものの、韓小姐には別に男がいることに気づき、意気消沈していたことを知った。李護と呉容は韓小姐と密通している男が王建東だと勘違いした。王建東はその男が馬警察官であることを知りながら、友人の誤解を解こうともせずに弁解もしなかった。このような泰東旅館の現状を打破するきっかけとなったのは、ある夫妻が6号室に新しく引っ越してきたことである。夫は中学校の教員で張教授といい、妻の張太太はかつて張教授の学生であり、すでに妊娠している。実は、張太太は王建東の元恋人で、張教授に騙されて妊娠していたのである。韓小姐が旅館から出ていったことで、王建東と張教授、呉容、馬警察官の不和がますます深刻になる。ある日、「私」は王建東と張太太の密会を見て、二人が出奔を計画していることを知る。しかし、約束の日の前日、王建東は馬警察官と張教授に陥れられ、「阿片を不法販売」という名義で逮捕された。小説はここで、未完成のままとなっている。

「都市的黄昏」と「柳陰」も含めて、鍾理和の早期創作の多くは男女の恋愛を主題としてい

る⁴⁹。この作品も「泰東旅館」を舞台に、宿泊客である恋人、夫妻、奸夫、疑われた者などの複雑な人物関係を描いている。

「都市的黄昏」と「柳陰」では、主人公は他人の不幸な恋愛、婚姻に対して傍観者であり続けようとしたのと異なり、「泰東旅館」では、主人公は王建東に対し主体的に関わろうとしている。主人公は旅館のなかで唯一王建東を理解し、彼の味方として張太太との出奔を助けていた。しかし「私」がどんなに同情を寄せ、助けようと思っても、彼らの出奔は失敗に終わる。

作中のストーリーは、おもに泰東旅館という三合院内部で展開される。泰東旅館は不安定な場所であり、宿泊客はつねに流動的である。小説での主人公の移動に従い、韓小姐の鼓書によって人が集められ、李護、呉容、王建東が住んでいた何度も衝突が起きた1号室、「私」と妻が平和な暮らしを過ごしている5号室、後に張教授夫婦が引っ越してきて、張太太の泣き声がしばしば聞こえる6号室、佟文振と楊光祖が阿片を吸う7号室、友人の沈若彰が15歳の妓女と性行為をした9号室、王建東と張太太が密会する厨房など、泰東旅館の至る所で物語が進んでいる。

このように、「都市的黄昏」や「柳陰」と同じように男女の恋愛を主題としているものの、鍾理和は作中に矛盾と衝突が溢れた「泰東旅館」という文学的な空間を作中に描写・構築した。その空間のなかで人々の恋愛を妨げるのは、婚姻制度ではなく、「まともな責任意識を持たない者」⁵⁰である。恋愛や婚姻により不幸になった人々は、相変わらずその不幸を繰り返しているのだ。

3. 「地球之黴」

「地球之黴」は未完成の作品で、「序章」のほかに3節から構成される。しかし第3節はタイトルしか残されていない。あらすじを以下にまとめる。主人公の崔志信は、奉天汽車行で何年も働いているものの、運転手という仕事に不満を持っている。「深夜的喜劇」のなかで、崔志信は紅梅町12号に呼ばれ、嫖客の武田という男、妓女の静児、やりて婆を柳町玉井まで送った。その途中、嫖客が車から降りようとするのを、やりて婆が慌てて引きとめるといった事件を経て、どうにか目的地に到着した後、崔志信はやりて婆から運賃に色をつけた金を受け取った。また、「二十五日与酔鬼們」は、給料日である25日の大騒動を描写している。乗客として現れるのは、でたらめばかりいう課長と、排水溝に落ちて宿直することさえ忘れてしまった建築会社の社員という、2人のよっばらいである。

「地球之黴」はストーリー性がさほど強くなく、崔志信の運転記録を手がかりに断片的な叙述を行っている。また、「序章」では、自動車や電灯などの描写に力点が置かれている。そのほかには、音について以下のような描写もある。

自動車は悪獣のように咆え、天地が崩れるような電車の轟音が、地面を驚かせるように人々の足元で震えはじめる。馬車の鈴のチリン——チリンと澄んだ音、どこからか響くやけどした子供が空泣き叫ぶような工場の汽笛の音……（中略）……部屋のなかで、眠り込んでいた老人は、時としてこうした騒音に煩わされ、怖い悪夢をみたかのように、驚きながら目を醒まし、正常な意識が失われたこの都市を一瞥し、首を振って、再び深い眠りに落ちた。⁵¹

そのほかにも、「序章」には、電灯を「人造の太陽」⁵²と近代文明の象徴として描いている場面もある。電灯は、日が出ると働き、日が落ちると休むという農耕時代の簡素な生活リズムを変えるものであった。以上の引用文から窺えるように、「地球之徴」の「序章」でも、電灯や自動車など近代文明の象徴が溢れた賑やかで明るい夜の世界と、静かで暗い夜の世界が対照的に構築されている。

文学作品では、明暗の対照は多い。クラングは文学作品における都市地理景観および権力の空間化を論じる際に、レイモンド・チャンドラーの『ロング・グッドバイ』⁵³を例として、一つの都市のなかに、明るく安全な金持ちに属する世界と、暗くて貧しい人々に属する地下世界の二つの対照的な空間が描かれていると指摘している⁵⁴。またクラングは、1848年にパリで起きたブルジョアと労働者層の闘争のなかにも、労働者層がまず街灯を壊したことを指摘している。なぜなら、街灯の下では、貧しい人々が何をしているのかを警察が見られるからである。さらに、街灯などの公共照明という地理景観は政府の管理と相応するという⁵⁵。

それでは「地球之徴」の序章における近代文明の象徴が溢れた賑やかで明るい夜と、静かで暗い夜の二つの世界はそれぞれどのような集団と対応しているのか。クラングの観点から分析すれば、賑やかで明るい空間は、政府の管理下にある受益者たちの世界で、それとは対照的な静かで暗い空間は非恩恵層の世界だろう。さらに、当時の満洲国の現状を踏まえると、受益者は植民者である日本人、非恩恵層は被植民者だと思われる。

さて、小説の第1節と第2節には、主人公の崔志信が登場する。主人公は自分の仕事について、運転手と妓女は同じく、老爺（旦那様）に仕えなければならないと述べている⁵⁶。ところで、この小説で崔志信が仕えた老爺とは何者か。「深夜の喜劇」で言及されている紅梅町12号は満鉄社員の住宅区である。つまり、乗客でありながら嫖客でもある日本人の武田は、満鉄の高級社員⁵⁷である。また、彼の目的地である柳町は、柳町通とも呼ばれ、有名な花柳界であった。崔志信もこの地名から乗客3人の身分を判断していた。

また、「二十五日与酔鬼們」では、崔志信が、酔っ払って排水溝に落ちた男を青葉町まで送る場面がある。1938年に、奉天市公署は奉天市内を11区に分割した。その際、満鉄の附属地と商埠地を合併して、大和民族を意味する「大和区」と命名した。大和区は日本人が集住しているのだが、なかでも青葉町は大和区の最も栄えた繁華街であり、日本資本による店舗が多く営業していた⁵⁸。

序章に対する分析と共通するが、崔志信が仕えた老爺は、賑やかで明るい空間で暮らし、満洲国政府管理の受益者たる日本人で間違いはない。張良澤が述べたように、奉天は日本人にとっては金儲けの世界で、享楽のための天国である⁵⁹。目的地まで車を運転した崔志信は、妓女と酒に溺れている日本人男性に便宜を提供し、植民者の日本人が被植民地の奉天で享楽を得るための一環となり、知らず知らずのうちに植民者の協力者になってしまったのである。しかし、満洲人と同じく被植民者である崔志信は、日本人に属する空間とは明らかに相容れない。崔志信は客との会話がほとんどなく、つねに車のバックミラーを通して客を観察している。崔にとって、日本人の世界に一時的にいる場所は「車内」のみであろう。「地球之徴」は「車内」という空間を構築し

ているが、その空間は流動的である一方で、客の指定したルートに従うばかりの閉塞的な空間であると言えよう。

4. 「門」

「門」は1945年10月に完稿した日記体の中編小説である。「門」の題名について、鍾理和は「前に創作した「絶望」は「門」と改名してもいいかもしれない、あるいは慍生が言ったように「落葉」という題に改名する」と書いている⁶⁰。

「門」の内容は次の通りだ。主人公の「私」袁寿田は、比較的安心して暮らせる日本人地区から、満人街で大北辺門の外側に位置する「日」の形の屋敷に引っ越す。屋敷には2、30世帯が住んでおり、なかには家族のように接してくれる斐老伯と老太太の一家がいる。とくに老太太は、妊娠している妻に至れり尽くせりの配慮をする。貧しいなかで、妻が男の子を出産すると、斐老伯や新京の友人は、妻と息子のために、意固地にならずに仕事を探せと「私」に勧める。「私」は無職のまま、息子が百日咳にかかっても医者呼べず、弟が頼って来ても世話することもできない、貧しくて絶望的な日々を過ごしている。5月22日、昨年待ち続けていた友人の康孝先に関する知らせが来るものの、彼は亡くなっていた。私の最後の希望も消えてしまったのだ。

鍾理和のほかの満洲叙述と比較すると、「門」は頻繁に議論されてきたと言える。澤井律之は「門」について以下のように分析している。

「門」においての理和は、人間らしさを失った社会に対する嫌悪、自己の失業と生活苦、異郷で人の子の親となった不安など、おそらく理和の実体験であろう事実、理和の理念の化身である友人の死という虚構を混ぜ入れ、絶望の淵へと沈んでゆく自己の想念を表現した。⁶¹

澤井が述べたように、「門」は虚構の部分がありながら、鍾理和の奉天での実体験に基づいて創作されたものである。「門」を執筆したのは戦後初期の北平であり、この特別な状況のなかで、鍾理和は中国についてどのような感情を持っていたのか。それは「門」の創作にどのような影響をもたらしたのか。その一端は鍾理和の日記から垣間みることができる。

1945年9月9日、鍾理和は3年ぶりに日記の執筆を再開し、「台湾省旅平同郷会」の結成式に参加したことを記している。鍾理和は「異民族の支配と蹂躪のもとで50年以上を過ごしてきた人々は、感慨無量であろう」と喜びを表す一方で、「中央からの来賓が臨席しておらず、祖国は台湾に関心を抱いているのか？ 疑念、苦悶、不満」とも書いている⁶²。

10月2日には、「中国人の台湾に対する「山海経」式の認識と関心」⁶³と不満を述べている。10月4日の日記には、鍾理和はミャンマーで戦闘した中国兵の映画を見て、思わず涙をこぼしたことを記録している⁶⁴。

以上の日記から窺えるように、戦後初期の鍾理和は祖国の戦勝に感動し、誇りに思う一方で、台湾に対する無関心に不満を感じているのだ。彼の中国に対する感情は複雑で、彷徨っている

ことがよくわかる。さらに日記のなかで彼は自分の感情について、「今こそ、私たち青年が奮起し、行動すべき時であるが、私は相変わらず自らの空虚を感じている」⁶⁵と書いている。こうした背景のもとで創作された「門」からは、迷いや不安、寂寥感が感じ取れる。

「門」もまた、主人公の視線に沿って出来事を時間軸の通りに記述するものではない。たとえば、11月11日に書かれるのは7月5日に友人の康孝先と告別した際のことである。また康孝先との会話や彼の死を暗示する不吉な夢が作中の隅々に挿入される。「門」はこうした非線形的な叙事法を用いることによって、物語をより立体的に描いているのである。クラングはマルセル・ブルーストの作品を例に挙げ、『失われた時を求めて』⁶⁶において、自由な回想が現れるように、一連の脱線的な描写が行われ、それらの描写は、瞬間的な体験とそれによって呼び起こされた記憶から生まれたもので、時間的な叙述も直線的な進行を呈さないと指摘する⁶⁷。このような立体的な描写は、20世紀に入り、都市生活のリズムが加速し、都市における地理的空間が断片化していくことで生まれた新しい文体であるという。

作中では、繰り返し門のイメージが提起される。「ギー——冷たく寂しい門を閉める音、つづいて、絶望的で粗暴な無情の掛け金の音」⁶⁸という描写から始まり、文末も「ギー——屋敷の門がまた閉ざされた、つづいて、その無情で絶望の掛け金の音……ならば、閉じろ、門よ、閉まれ、永遠に閉まっている」⁶⁹と門を閉ざす描写で終わる。

門というのは、ある空間の出入口として認識されている。「門が今日を過去から切り離し、この静かな場所を世間から隔離した時、心も広くて複雑な世間の外部から、内部へと向かっていく」⁷⁰といった表現からわかるように、作品における門は、外部世界と内部をつなぎ、隔離する機能をはたしているのである。

では、「門」という作品に焦点を当てて描写・構築した空間はどのようなものだろうか。「門」における描写の中心は、失業、妻の分娩、初めて父親となった感慨、経済的な苦境と本心に反する仕事との矛盾などであり、作品の焦点は、おもにそうした出来事に直面した主人公の精神的内面がどのように変化し、妥協し、堅持したかに当てられている。また、「外部世界で失意を味わった人は、結局自分の内部の奥底に戻っていく」⁷¹という描写からも窺えるように、外部世界と内部を隔離する機能をはたしている門が閉じられることで、門の内側では閉鎖的空間が形成される。その空間は外部世界に絶望している主人公の精神的な内面世界でもある。

作品の終盤で、門は内側から閉ざされるが、これは外部世界に対する拒否の姿勢を示しているといえよう。「門よ、閉まれ、永遠に閉まっている」という結びの言葉とともに、鍾理和は満洲を背景とした新たな作品を創作しなくなった。

以上本節では、鍾理和が満洲を背景に創作した「都市的黄昏」（「柳陰」）、「泰東旅館」、「地球之徴」、そして「門」における文学的空間を切り口に分析を行った。結論として、上述した5作が描写・構築した空間のそれぞれは、婚姻制度によって不幸になった人々の避難所としての「奉天」、さまざまな理由によって自由恋愛が遂げられない「泰東旅館」という三合院、日本人に属する賑やかで明るい世界のなかで唯一の居場所である「車内」、そして最後には「門の内側」という外部世界と隔絶している主人公の精神的な内面空間である。そこから、鍾理和の満洲叙述を

一つの全体として見れば、作品で描写・構築された空間が開放的なものから閉鎖的なものへと変わっていくとともにしだいに縮小し、最終的には主人公の精神的な内面世界へと収束していくことに気づくだろう。

おわりに

本論は、鍾理和の満洲経験、とくにこれまで十分に究明されていない満洲自動車学校や奉天交通株式会社を確認した上で、鍾理和の満洲叙述における文学的空間を分析すると、焦点を当てて描写された空間がしだいに縮小していき、開放的なものから閉鎖的なものへとになっていくことを明らかにした。

満洲叙述を一つの全体として分析すると、鍾理和の満洲意識が流動的なものであることがわかる。その叙述は鍾理和にとっての満洲が希望から失望へと変化していく過程にあることを示している。作品における文学的空間がしだいに縮小し、最終的には主人公の精神的な内面世界へと収束してしまうのと同時に、鍾理和の満洲叙述もそこで完成するのであった。

注

- 1 柳書琴「満洲の内在化と台北描写——林輝焜『争へぬ運命』における満洲の影と潜在的輿論」『日本研究』第46巻、2012年9月、151-192頁。
- 2 『台湾日日新報』は1898年に『台湾新報』と『台湾日報』を合併して創刊されたもので、1944年廃刊までは台湾総督府の御用紙として、日本統治期の発行期間が最も長い日刊紙であった。
- 3 たとえば、林輝焜の『争へぬ運命』と朱点人の「脱穎」が挙げられる。林輝焜「争へぬ運命」（『台湾新民報』、1932年7月から連載）河原功編『台湾長編小説集三』緑蔭書房、2002年8月。朱点人「脱穎」『台湾文学』第1巻第10号、1936年11月15日。
- 4 1957年10月30日、廖清秀への手紙、鍾怡彦編『新版鍾理和全集第七冊』高雄県政府文化局、2009年3月、137頁。
- 5 1930年に創作した「由一個叫花子得到的啓示」と「雨夜花」の原稿は未発見であり、現存する原稿のなかで最も早いのは1937年1月に創作した「理髮匠の戀愛」である。
- 6 本論における満洲叙述とは、満洲を背景に創作され、満洲社会に対する描写や感想が書かれた作品である。本論における満洲人とは、満洲に暮らし、日本人、朝鮮人、台湾人などの他国籍の者を除く、漢民族と満族を含む中国人のことを指す。
- 7 「都市的黄昏」（「柳陰」）の主人公は満洲自動車学校在学中であり、「泰東旅館」は主人公が妻を奉天につれて来たばかりのことが描かれる。「地球之徴」の主人公は奉天交通株式会社に就職した頃のことを題材となっており、「門」の主人公は失業して満洲から北平に移住しようと思いはじめる頃のことである。
- 8 1957年5月30日、廖清秀への手紙、『新版鍾理和全集第七冊 鍾理和書簡』、120頁。原文：小説與説故事的區別在於文體上的區別：前者的手法是描寫的，後者的手法是記述的，（中略）記述體的作品，就像白頭宮女概話當年，說來娓娓動聽，但那裡面似乎只有事件，沒有經過，只有時間的緯，只有縱的敘述，卻沒有背景，沒有場所，沒有空間的經，沒有橫的描寫。
- 9 「空間論的転回」は、1980年代後半から1990年代にかけて、社会学、地理学、人類学、メディア論といった人文社会科学において盛んにみられた。そこでは、現代の都市や社会の構造、それを貫く論理を、空間をめぐる社会的な諸関係とそれを貫く論理としてとらえようとする空間論的な問題意識をゆるやかに共有し、また相互に影響を与え合ってもいた。若林幹夫「連載 都市の全域性をめぐって（上）——空間と「場を占めぬもの」」『10 + 1』10号、株式会社トゥーヴァージンズ、1997年8月、246-254頁。
- 10 Mike・Crang, "Literary landscapes: writing and geography" *Cultural Geography*, Routledge, 1998年4月、43-58頁。
- 11 Emile Zola, *Au Bonheur Des Dames*, Gallimard, 1995年5月。エミール・ゾラ〔伊藤桂子訳〕『ボヌール・デ・ダム百貨店』論創社、2005年12月。

- 12 Mike・Crang, *Cultural Geography*, 52-53 頁。
- 13 同上書、57 頁。
- 14 王歡歡「空間轉向與文學空間批評方法的建構」『中国文学研究』第 2 期、2018 年 1 月、62 頁。
- 15 Mike・Crang, *Cultural Geography*, 57 頁。
- 16 澤井律之「北京時代の鍾理和」『よみがえる台湾文学 日本統治期の作家と作品』東方書店、1995 年 10 月、451-468 頁。
- 17 今泉秀人「満洲から北平へ——鍾理和の中國大陸における事跡について」『立命館文学』第 667 号、2020 年 3 月、52-65 頁。
- 18 董慧『台湾文学中的東北書写』九州出版社、2018 年 6 月。
- 19 王璇「抗戰時期旅居大陸的台籍作家群研究（1931-1945）」南京大学文学院博士学位論文、2019 年 5 月。
- 20 「台湾総督府旅券系統」<https://passport.ith.sinica.edu.tw>（2025 年 2 月 17 日アクセス）を参照。
- 21 今泉秀人、前掲論文、57 頁。
- 22 鍾理和「地球之徴」（1944 年）鍾怡彦編『新版鍾理和全集第五冊』、250 頁。原文：我嗎，來的時候，正趕上汽車熱的高潮中，所以稀里糊塗就穿上了這套衣服。
- 23 菊池正憲「試験は語る 発掘！自動車免許試験（中）昭和・戦前戦中編」『週刊朝日』119（24）、2014 年 6 月 13 日、118-121 頁。
- 24 『盛京時報』、1906 年 10 月に創刊し、1944 年 9 月に『康徳新聞』と改名し、1945 年 8 月の日本敗戦とともに停刊した。
- 25 1936 年 1 月 9 日の『盛京時報』の 6 頁に満洲自動車運輸株式会社から「黄汽車招募車掌及運轉手啓事」という広告がある。
- 26 たとえば、1938 年 1 月中、『盛京時報』における東亜自動車学校の学生募集広告が、少なくとも 5 日、8 日、13 日、15 日、20 日、22 日、25 日、28 日、30 日に 9 回以上載っている。
- 27 1938 年 1 月 30 日、『盛京時報』の 4 頁に東亜自動車学校と新京自動車学校の広告である。原文：現今司機人材極告缺乏、今後司機之需要、將益增大、就職實屬唯一良機、有志者請速入學。
- 28 鍾理和「都市的黄昏」（1939 年 1 月 14 日）鍾怡彦編『鍾理和全集第八冊』、21 頁。原文：我常要聽到人家說滿洲這樣的好，什麼新天地到底是不错，只如我學校時代的同學，都也走了不少的人，大部分是來滿洲投入自動車界的。（中略）逢巧新報上看到就是現在這學校的招生廣告，我便決心要來了。
- 29 日本統治時代の朝鮮で発行された朝鮮総督府の機関紙『毎日新報』だと思われる。
- 30 「招收新生」『盛京時報』、1938 年 7 月 14 日、2 頁。原文：招收新生 / 八月一日新學期開始 由本校畢業後考票合格者最多 / 現有在校學生一百一十餘人 / 校中設備完善堪稱為東洋第一 / 一、新式練習車十餘輛此外並有載重汽車 / 二、練習場寬敞 / 三、以電影教授 / 四、各種實物標本達數千件 / 五、教室宿舍設備完善 / 六、修理實習工場設備完全 / 另備職業免費介紹部 / 招收各科人員 / 本科 三個月畢業 五十名 / 受驗科 一個月畢業 十名 / 速成科 兩個月畢業 五十名 / 株式會社奉天タク附屬 滿洲自動車學校 / 奉天商埠地十一緯路五五 電話（一一）一九四四
- 31 「招收新生」『盛京時報』、1940 年 7 月 4 日、2 頁。
- 32 1937 年 6 月 7 日の『盛京時報』1 頁目の「招生」広告では、学生募集数が 25 名、願書の締め日は 6 月 24 日、入所試験は 6 月 15 日午前 9 時と記載されている。
- 33 1940 年 7 月 3 日の『盛京時報』の 9 頁目の「招募汽車學生」という東亜自動車学校の広告のなかで、教員は滿人専任と使用する教科書は滿洲語のものと特筆した。鍾理和作品「都市的黄昏」と「柳陰」のなかで、滿洲自動車学校の教員は日本人、使用する言語は日本語であることが窺える。
- 34 張金春「近代瀋陽城市「雑巴地兒」研究」『瀋陽大学学报（社会科学版）』第 19 期、2017 年 11 月、642-646 頁。
- 35 大阪毎日新聞社編『日本都市大観 昭和 11 年版』大阪毎日新聞社、1936 年 2 月。
- 36 「奉天交通株式会社概況」解学詩編『滿洲交通史稿 第 20 卷』社会科学文献出版社、2012 年 4 月、480-481 頁。
- 37 「遊覽自動車事業」、同上書、488-490 頁。
- 38 「營業路線」、同上書、512-518 頁。
- 39 「招募汽車運轉手」『盛京時報』、1938 年 1 月 19 日、4 頁。原文：募集人員：滿洲國人若干名 / 資格：持有普通免許證及就業免許證者 / 年齡：滿二十歲以上 / 試驗期日：壹月二十六日午前九時 / 試驗場所：小西邊門外交通會社乘務員教習所 / 對於右項招募之希望者迄試驗期日前攜帶履歷書及最近像片到教習所接洽或將履歷書遞來均可 / 康徳五年一月十八日 / 奉天交通株式會社
- 40 「奉天交通株式会社概況」解学詩編『滿洲交通史稿 第 20 卷』、480-481 頁。
- 41 鍾理和「柳陰」（1954 年 8 月 21 日）鍾怡彦編『鍾理和全集第一冊』、217 - 238 頁。

- 42 「鍾理和写作年表」に基づいて筆者が作成したものである。「鍾理和写作年表」鍾怡彦編『新版鍾理和全集第八冊』、421-429 頁。
- 43 鍾理和「都市的黄昏」、20 頁。原文：幸福的桎梏生命的鏽蝕。
- 44 同上、19 頁。原文：就為了這三文不值的父親，我可憐的不能不駝起家庭的重累掙扎了。我怎樣都料不到我的一生將要這樣草率而黑暗地完了的。
- 45 鍾理和「柳陰」、238 頁。原文：為了女人，為了不合理的婚姻，我們就須接受這樣多的苦難！
- 46 「包辦婚姻」とは、本人の意志ではなく、親が決めて強制的に成立される婚姻である。
- 47 鍾理和「都市的黄昏」、40 頁。原文：聽了這一席話不期使得我感到一種優越，瞧到他——金君——和自己有不同的存在時，在不滿足而不幸之中猶微微覺到不少的自慰、自得、和自負。但在這自慰自得和自負的後面，同時有一抹恐怖和淒冷的秋風，掠過我的心田，使我不戰而慄的吐了一口涼氣。並提醒我離我不遠的前面，展開有望不見的白茫茫的大海。
- 48 鍾理和「柳陰」、228 頁。原文：這是早婚和包辦式婚姻下面的犧牲者……
- 49 男女の恋愛を主題とする作品は、「理髮匠の恋愛」(1937 年 1 月)、「都市的黄昏」(1939 年 1 月)、「泰東旅館」(1941 年)、「遊絲」(1943 年 8 月)、「薄芒」(1944 年 5 月)、「秋」(1945 年 10 月)が挙げられる。
- 50 鍾理和「泰東旅館」、210 頁。原文：沒有正常責任觀念的人。
- 51 鍾理和「地球之微」、247 頁。原文：汽車咆哮著似惡獸，電車的像天塌地裂的哄聲，使地皮受驚似的在人們的腳底下震顫起來，馬車鈴的叮令——叮令的清脆聲，由什麼地方響起的工廠的汽笛，則如小孩受了燙似的乾嘔……（中略）……屋宇，那浸在昏睡中的老人，時而被這些叫囂煩擾著，像做了個可怖的惡夢一般，睜著眼睛驚愕地醒過來，瞧一瞧這如喪失了正常意識的都會，搖搖腦袋，又困頓地陷入深睡裡了。
- 52 同上、246 頁。原文：燈光——它是人造的太陽、光明。
- 53 Raymond Chandler, *The Long Goodbye*, Vintage, 1988 年 12 月。レイモンド・チャンドラー〔村上春樹訳〕『ロング・グッドバイ』早川書房、2007 年 3 月。
- 54 Mike・Crag, *Cultural Geography*, 51-52 頁。
- 55 同上、50-51 頁。
- 56 鍾理和「地球之微」、249 頁。原文：「我常常這樣想，司機和妓女——那是同路人——」/「什麼意思？」/「伺候老爺！」
- 57 張良澤「鍾理和作品中的日本經驗與祖國經驗」『中外文学』2 卷 11 期、1974 年 4 月、45 頁。
- 58 2016 年 11 月、瀋陽視覺文化館は、奉天の青葉町派出所で警察として働いたことがある孫克実に取材し「孫克実口述：從光復到解放」というドキュメンタリー作品を作成した。本論は転載した文章を参照する。<https://www.163.com/dy/article/DKOABRNS0514R9P4.html>(2025 年 1 月 23 日アクセス)
- 59 張良澤「鍾理和作品中的日本經驗與祖國經驗」、45 頁。原文：奉天對於日本人來說，是淘金世界，是享樂天堂。
- 60 1945 年 10 月 5 日日記、張良澤編『鍾理和全集卷⑥ 鍾理和日記』遠行出版社、1976 年 11 月、15 頁。原文：前所作「絕望」似可改名為「門」，抑或如惺生所言題為「落葉」。また、鍾怡彦が編集した全集のなかで、「惺生」を「隆生」と記し、誤記だと考えられる。1945 年 10 月 5 日日記、鍾怡彦編『新版鍾理和全集第六冊』、20 頁。
- 61 澤井律之、前掲論文、465 頁。
- 62 1945 年 9 月 9 日日記、鍾怡彦編『新版鍾理和全集第六冊』、7 頁。原文：在異族支配與蹂躪之下，踱過五十餘年的人們，感慨當無量也。（中略）中央沒有來賓蒞場，祖國對台灣是否抱有關心？疑問、苦悶、不滿。
- 63 1945 年 10 月 2 日日記、同上書、18 頁。原文：國人對台灣的山海經式的認識與關心。
- 64 1945 年 10 月 4 日日記、同上書、20 頁。
- 65 1945 年 9 月 10 日日記、同上書、8 頁。原文：現在正是要求我們青年努力與活動的時候，我卻親切地覺到自己的空虛。
- 66 Marcel Proust 『À la recherche du temps perdu』Gallimard、1999 年 2 月。マルセル・ブルースト〔吉川一義訳〕『失われた時を求めて』（第 1 巻～第 13 巻）岩波文庫、2010 年 11 月～2018 年 12 月。
- 67 Mike・Crag, *Cultural Geography*, 55-56 頁。
- 68 鍾理和「門」、136 頁。原文：咿——淒冷而寂寥的關門聲，隨著，就是絕望而粗暴的無情的落栓聲。
- 69 同上書、212 頁。原文：咿——院門又被關上了，接著，就是那無情而絕望的扣栓聲……那麼，關吧！門呀！關吧！永閉著吧！
- 70 同上書、136 頁。原文：當門把今天從過去，把幽靜的這地方從世間隔離開時，心也就從廣大而繁雜的世間的外部，而向內部展開去。
- 71 同上書、183 頁。原文：失意于外部世界的人，結果是會歸回自己內部的深處裡去的。

(2024 年 10 月 15 日投稿受理、2025 年 3 月 31 日採用決定)